子どもたちの資質・能力を育てる授業づくり推進リーフレット

乙訓の学び

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、単元全体を捉えて「引率スタイル」と「オリエンテーリングスタイル」という視点をうまく組み合わせた授業デザインになっているか、一緒に考えてみましょう。

引率スタイル

●教員が地図を持って目的地まで連れて行く。
⇒子どもは教員の後をついて行く。

オリエンテーリングスタイル

●子どもが地図を持って自分の力で目的地に向かう。
⇒教員は必要な時にサポートする。

授業デザインにおいて、単元全体を捉えて「引率スタイル」と「オリエンテーリングスタイル」の両方の視点をうまく組み合わせることが大切です。このリーフレットでは、子どもたちが「学びの地図」を持ち、「何のためにするのか」が明確な学習活動に取り組みながら、必要に応じて他者と相談したり、学習を振り返って調整したりするなど、見通しをもって学びを深めていく「オリエンテーリングスタイル」の視点に焦点を当てた授業デザイン例について示しています。

「オリエンテーリングスタイル」の視点での授業デザイン例

☆「学びの地図」を子どもたちに示し、**ゴール（育成したい資質・能力）**を共有（目標設定）
☆その目的地に行く**必然性を感じられる**仕掛け（課題設定）
☆必要な情報を集められているか、**チェックポイント**の設定（形成的評価）
☆どのルートで進んで行くか**他者と協力して考察**（協働的な学び）
☆より良い進み方を考えて**軌道修正**（自己調整力）
☆道に迷っても、転んでも、しんどくても、**あきらめない**（粘り強さ）
☆時には、自分の力で地図に載っていない**新たな道を開拓**（課題解決能力）
☆たどってきた**ルートが適切なものであったか**の確認（自己評価）
☆スタートからゴールまでの**成長**を記録（総括的評価）

京都府乙訓教育局

子どもたちの資質・能力を育てるために

今、求められている『学力』とは

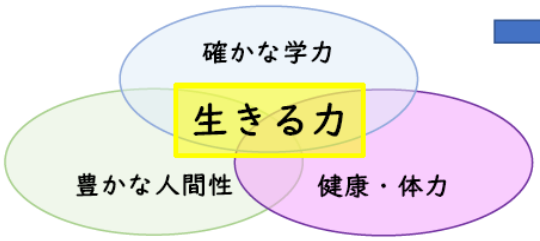
図１のように、学習指導要領の改訂により、学校教育が長年育成を目指してきた「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が三つの柱に整理されました。

①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）

②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）

③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

図１



「生きる力」

知（確かな学力）

基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

徳（豊かな人間性）

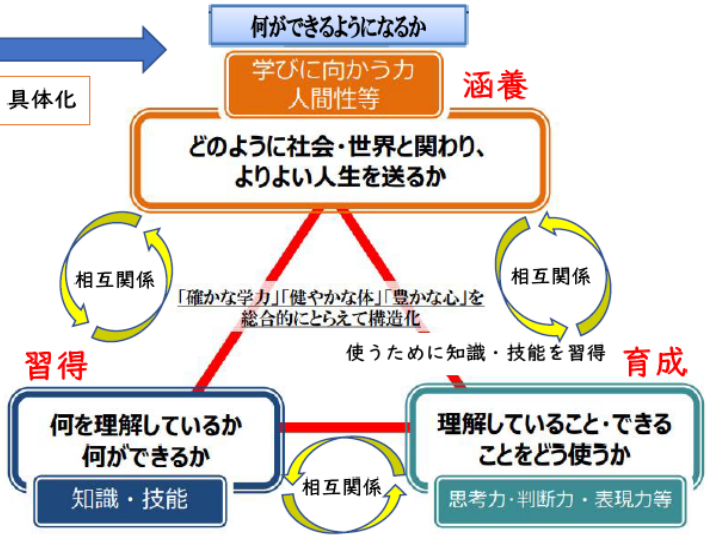
自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやることや感動する心などの豊かな人間性

体（健康・体力）

たくましく生きるための健康や体力

※基礎・基本：学習指導要領の内容

具体化



※育成すべき資質・能力の三つの柱（文部科学省）に加筆

学習指導要領の改訂を受け、第２期京都府教育振興プランでは「京都府の教育の基本理念」について、図２のように示しています。また、京都府教育委員会では「認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育の展開」について、図３のように示しています。

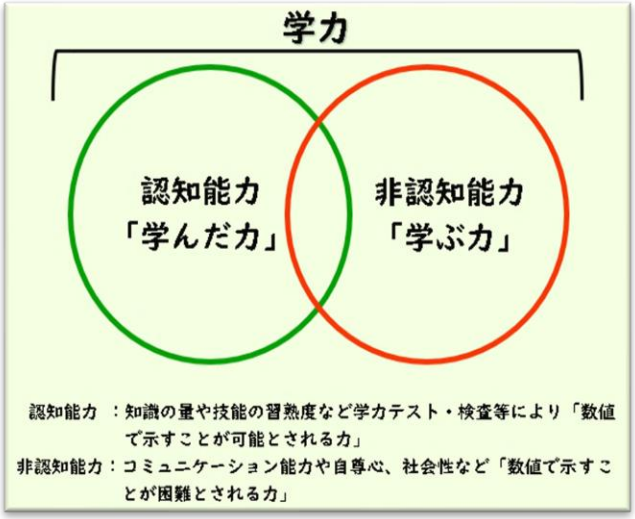
【京都府の教育の基本理念　概念】

図２

誰もが、周囲からの愛情や信頼、期待などに「包み込まれているという感覚」を土台として「自己肯定感」をはぐくむことにより、上昇するらせんのように「主体的に学び考える力」「多様な人とつながる力」「新たな価値を生み出す力」を少しずつ身に付けながら、「目指す人間像」へと成長していく様を表しています。

【認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育の展開】

図３



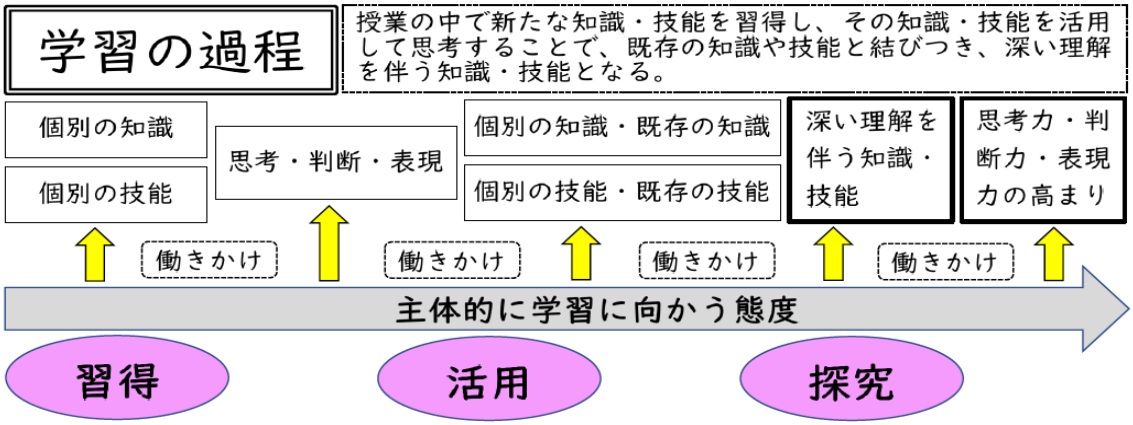
予測困難なこれからの時代において、子どもたちには自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められます。それらの力の向上を目指して、知識や技能などの認知能力だけでなく、意欲や粘り強さなどの非認知能力をバランスよく、一体的にはぐくむことを表しています。

子どもたちの資質・能力を育てるために

「主体的・対話的で深い学び」を意図した授業デザイン例

「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の関係性から『学習の過程』を整理すると図４のようになります。個別の知識及び技能の習得にとどまらず、深い理解を伴う知識及び技能を習得し、思考力・判断力・表現力等を高めることが重要です。
このような『学習の課程』が単元や題材など内容や時間のまとまりの中で繰り返されます。
【留意点】図４は、学習の順序を一義的に示しているものではありません。

図４



『学習の過程』について整理ができたら、単元構想に基づいた授業デザインについて考えてみましょう。下記の例のように、学習指導要領を参考に「どのような資質・能力を身に付けるか」を明確にすることで、子どもたちの学びをより的確に見取ることができます。

国語科　授業デザイン例「読むこと」(小学校中学年)

この物語文を読むことで、児童生徒自身が他の物語を読めるようになるための資質・能力を付けられるように意識する。

【単元のゴール】読んで感じたことや考えたことをまとめる

【単元の目標　そのために身に付けたい資質・能力】

知・技	○様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにしている。	◆人物の様子や特徴を表す語句、人物などの行動や気持ち、性格を表す語句に着目する。
思・判・表	○「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像している。 ○「読むこと」において、 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。	◆複数の場面の叙述を結び付けながら、気持ちの変化を見いだして想像する。 ◆情景と登場人物の気持ちの変化を併せて考える。 ◆自分の体験や既習の内容と結び付けて、自分の考えを形成する。
主体的な学び	○進んで、登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像し、学習課題に沿って、感じたことや考えたことを文章にまとめようとしている。	◆文章中の言葉から感じたことを言葉にすることの良さがわかる。 ◆物語文の中で使われている言葉が醸し出す味わいを捉える。

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法など
1 2 3	○学習のねらいや進め方をとらえ、学習の見通しを持つ。	・登場人物、主な出来事、結末などを捉えながら読むようにする。 ・場面の様子、登場人物の言動や様子などを表す語句に着目して読むように指導する。	〔知・技〕 場面の様子や登場人物の言動、様子などを表す語句について着目し、語彙を豊かにしているかを確認する。
4 5 6 7	○登場人物の気持ちが大きく変化した場面はどこかについて、考えをまとめる。 ○学習課題について、友達と考えを交流する。	・物語全体の場面の移り変わりを確認し、登場人物の行動が大きく動いた場面を取り上げる。 ・登場人物の気持ちとその根拠となった言葉や文をまとめるよう指導する。その際、行動や会話、場面の状況を表す言葉などに着目するように指導する。 ・友達の意見で参考になったことを付箋でまとめるよう指示する。	〔思・判・表〕 登場人物の様子や行動、気持ちの変化について想像しているかを確認する。 〔主体的な学び〕 登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像し、学習課題に沿って、感じたことや考えたことを文章にまとめようとしているかを確認する。
8 9	○初発の感想を振り返りながら、物語を読んだことに基づいて感じたことや考えたことを文章にまとめる。	・これまでの学習を振り返り、物語を読んで理解したことに基づいて、感じたことや考えたことをまとめさせる。 ・初発の感想を振り返り、どのように自分の考えが変わったのかを書くよう指導する。	〔思・判・表〕 文章を読んで理解したことに基づいて、既習内容と結びつけて感想や考えを記述しているかの確認をする。

(国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料を基に作成)

子どもたちの資質・能力を育てるために

「主体的・対話的で深い学び」を意図した授業デザインの実践

このリーフレットの内容を参考に「主体的・対話的で深い学び」を意図した『授業デザイン』を具体化させましょう。「毎回の授業で全ての学びが実現されるということではない」ことに留意して、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、「思考する場面」「対話する場面」「学習を見通して振り返る場面」などについて、意図をもって設定することが大切です。

単元を１つ選んで、以下の手順で授業をデザインしてみましょう！

ステップ１：単元の全体像を捉える

① 目 標 設 定：身に付けさせたい資質・能力（単元のゴール）を明確にする。
② 評価規準設定：資質・能力が身に付いたかを評価するための規準を設定する。
③ 課 題 設 定：学ぶ必然性のある学習課題を決定する。
④ 単 元 の 導 入：単元のはじめに子どもたちとゴールを共有し、見通しのもてる導入を工夫する。

ステップ２：単元の全体像に紐付けて授業の展開を構想する

⑤ 授業デザイン：単元のゴールに向かって学びをつないでいく授業を構想する。

〇単元のどこで、どのような資質・能力を身に付けるか確認しながらゴールに向かう学習活動を設定する。
⇒知識及び技能を習得する学習活動
⇒習得した知識及び技能を活用し、思考する学習活動
⇒深い理解を伴う知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力等を高める学習活動

〇ゴールに向かう途中で必要に応じて軌道修正する「指導に生かす評価」を行う。（形成的評価）

〇身に付けさせたい資質・能力に応じた「具体的な振り返り」の場を設定する。
（※上記全ての学習活動を毎時間必ず設定する必要はない。）

〇単元の終わりで達成状況を把握し、「記録に残す評価」を行う。（総括的評価）

子どもたちが自ら学ぶためには、子どもたち自身が「学びの全体像」を見渡せていることが必要だということですね。その上で、子どもたちが各教科等において「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という学びの姿を具体的に描いて、創意工夫を重ねる授業をデザインすることが大切です。「引率スタイル」と「オリエンテーリングスタイル」という視点をうまく組み合わせて、子どもたちの学びが充実したものとなる授業づくりに取り組んでいきましょう。

☆参考資料

京都府教育委員会
学習改善支援プラン

国立教育政策研究所
授業アイディア例（小学校）

国立教育政策研究所
授業アイディア例（中学校）

国立教育政策研究所
「指導と評価の一体化」のための
学習評価に関する参考資料